

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520637  
 研究課題名（和文） 中国少数民族の歴史人類学的研究 特に錫伯（シボ）族を中心に  
 研究課題名（英文） A Historical Anthropological Study on a Chinese Minority Group---  
 with a special reference to Xibe people  
 研究代表者  
 丸山 孝一  
 福岡女学院大学・大学院・非常勤講師  
 研究者番号：80037035

## 研究成果の概要：

全国でも 17 万余人しかいない錫伯族の文化研究は歴史人類学的に急を要する。本研究では東西 2 地域のシボ族が伝統文化を維持し、あるいは消失しつつある現状を観察、報告するものである。かたや伝統を失った東シボ（遼寧省）が伝統回帰を志向するのに対し、西シボ（新疆ウイグル自治区）では 240 年余維持してきた伝統を急速に喪失しつつある。そこに急接近してきた漢文化またはナショナリズムに対する同化と反発の文化力学的過程があることが判った。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	660,000	3,960,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：分科：文化人類学

細目：文化人類学・民俗学

キーワード：少数民族、錫伯（シボ）族、歴史人類学、新疆、文化変容、文化力学、ナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

われわれは、1986 年以来、新疆ウイグル自治区における少数民族の学際的、国際的共同研究をしてきた。当研究責任者の丸山は同地域のウイグル族、カザフ族と共に、シボ族の文化人類学的研究に従事してきたが、新疆ウイグル自治区伊犁地方のチャプチャル地区に集中して居住するシボ族は東北地方から

移住して以来、伝統的民族文化を比較的強く維持してきたが、近年中国ナショナリズムないし漢民族文化の影響が著しくなり、約 250 年の間維持してきた民族文化は急速に変貌しつつあることが明らかとなった。一方、東北地方のシボ族は隣接する漢民族の強い影響を受けて、文化的同化作用を受け、言語や宗教などにおける伝統文化をほとんど喪失

してしまったことが判明している。特に文化大革命の影響で、少数民族の宗教儀礼は強く否定され、チャプチャルでもシボ族の民族的アイデンティティは危機的状況に置かれてきた。この点は新疆ウイグル自治区チャプチャルのシボ族においても同様であり、周辺諸民族の強い影響を受けつつあるシボ族の文化変化を知るためには、彼らの源郷である東北地方のシボ族との比較研究をすることが緊急の課題であるという認識をもって本研究は始められた。

## 2. 研究の目的

本研究は、遼寧省瀋陽市瀋北新区におけるシボ族の集中的居住地区興隆台と新疆ウイグル自治区チャプチャル地区を比較研究し、今日におけるシボ族の社会文化的変化過程を明らかにすることを目的として始められた。便宜的に前者を東シボ、後者を西シボと称することにす。東シボは本来、東北3省に広がる分布を持っており、1764年(乾隆29年)、清朝の命により西域新疆地域における国境防備のための防人として約1000名が家族3000名と共に今日の遼寧省瀋陽市瀋北新区興隆台より派遣され、これが今日の西シボの源流となっている。東シボでは、清朝政権の母体となった満族がそうであったように、圧倒的多数派である漢民族に同化され、1949年の建国以来、55少数民族の一つとして公認されているとは言うものの、民族としての実態も、民族的アイデンティティも喪失してしまっていた。ところが、新疆ウイグル自治区の西シボでは、周囲をカザフ族、ウイグル族などのイスラム系諸民族に囲まれ、宗教、生活習慣等の相違から周辺文化に融合することなく、東シボから別れて以来約250年間、民族的内婚を8ないし9代継続し、言語、呪術・宗教等の民族文化の体系を維持して今日に至っている。

われわれは、こうした東西約3500キロを隔てる東シボと西シボの歴史の変遷の上で、同一民族がたどった文化の過程を比較することにより、この民族文化の実態を明らかにする。われわれは、少数民族としてのシボ族がドミナントな諸民族、あるいは中国全体を包括する「中華民族」との関係の中で、いかにして民族の独自性を維持するか、あるいは中国ナショナリズムとどのように折り合いをつけようとしているかに関心を持ってきた。自民族の独自性を貫徹しようとするれば、それは周辺からの働きかけに対して民族文化の内部に向かう民族文化の求心力を強調することになり、中国ないし外的な力に妥協するとすれば、民族文化のベクトルは逆に遠心力として外に向かうことになる。東シボでは文化の求心力が失われ、漢民族の文化に同化した。西シボでは今日まで約250年間、求心力が強く働いて、民族文化を維持することができたのである。

ところが、東シボでは、ごく近年になって伝統文化を復活させようとの動きが官民両レベルで見え、そのモデルとして西シボがふるさと文化として評価されるようになった。また、西シボでは、都市化、ナショナリズムの強化により、シボ文化は次第に影が薄くなりつつあり、異民族(主として漢民族)との通婚も多くなりつつある。

このような現状を踏まえ、われわれはシボ族文化が伝統を維持する方向と、崩壊させる方向との文化力学的葛藤を観察し、分析することがわれわれに与えられた課題だと考えた。このような観察と考察の機会を得難いものであり、しかも今日、この変貌過程は急速に進行しつつあるため、この研究は極めて急を要するものであると認識している。今日、いわゆる民族問題と称される問題は多いが、シボ族におけるこの事例研究が少数民族問

題の理解と解決に一つの資料を提供することは、われわれの目的の一つである。

### 3. 研究の方法

上述のように、東シボと西シボとの居住地は約 3500 キロメートル隔てている。両者の分離は約 250 年前に遡る。このような時間と空間の広がりの中でシボ民族の文化を synchronic(共時的)に、また diachronic(通時的)に研究することは、研究上、得難い機会であると考える。研究課題名として歴史人類学的研究と標榜する所以である。

このため、われわれは東シボでは遼寧省瀋陽市瀋北新区興隆台を中心に、興隆台学校や地方行政機関を訪問し、民族文化再興の政策や教育実践を観察した。同時に、民家を訪問し、各種階層の人々に面接し、民族文化に対するアイデンティティを確かめるインタビューを試みた、特に、旧暦 4 月 18 日はシボ族 4000 名が西シボへ旅立った記念すべき「西遷節」として、東シボでも重要な行事となっており、これに参与観察した。興隆台村には西遷記念博物館が建設されており、これは民族意識を確認、高揚させる機能が強いものと思われる、これを建設した地方政府の民族政策と考えることができる。

一方、西シボでは、主として伊犁師範学院を拠点として調査協力を得た。同学院は新疆師範大学との密接な関係があり、同学院校長が研究代表者の旧知の人であることも幸いして、各種の協力を得たが、他面、シボ族学生に対するアンケート調査のごときは、実行することができなかつた。外国人研究者に対する制約の一つであると認識した。しかし、一般民家を訪問することは可能で、そこでは伝統的民族慣行や民家の構造などを把握することができた。以前はチャブチャル地区への外国人の立入り自体が禁止されていたが、

今日ではそのような「未開放地区」はなくなっている。

最西端の国境に近いチャブチャルでの調査は政府の関心も高く、昨年(2008年)の北京オリンピック開催に伴うある種の緊張は感じられたが、これは外国人として現地調査をする場合の慎重さを必要とするところであろうと思われる。

### 4. 研究成果

#### (1) 東シボの動向

シボ族全体で約 17 万余人しかいない少数民族のうち、約 13 万人余を占める東シボであるが、すでに清朝時代から他の民族、特に満族との通婚があり、加えて蒙古族、続いて漢民族との婚姻が行われていた。異民族間の通婚は、出産、育児、教育の過程の中で、そのいづれかの親の民族文化を伝達する契機となるものであるから、通婚は民族文化へのアイデンティティ形成に重要な意味を与えるものである。東シボでは、先ず満族文化に吸収され、続いて満族文化と共に漢民族文化に吸収、同化された。しかし、ごく近年になって一部指導者層に民族文化への懐古と復帰の動きが現れ、失われた自身の民族文化の故郷を西シボに求める傾向が起こった。言語、民間信仰、年中行事など、一切の民間習俗が失われた後、4 月 18 日の西遷節を民族結集のシンボルと考え、おもに行政指導の下、西遷節が約 10 年前から行われるようになった。民族意識を取り戻す契機になったのは、西シボで盛んに行われている西遷節が大きな引き金となり、長く失われたアイデンティティを覚醒させる力となったと言える。興隆台に設置された西遷記念博物館はその象徴であろう。

#### (2) 西シボの動向

1764 年 4 月 18 日に出発して約 15 か月を要して到着した西シボの人びとは、以来約 250

年の間に 4000 名から約 38000 名になった。この数字は約 8 ないし 9 世代の間に、シボ族内婚により約 9 倍強の「純粹」の人口増になったことを示している。このような自民族のみによる内婚による人口増は他にあまり例を見ない事例として注目に値するが、そればかりでなく、文化の維持過程としてもきわめて注目すべきであると思われる。事実、西シボでは話し言葉はもちろん、文字も学校教育で維持され、シボ文字による地方新聞も定期的に発行されている。民間信仰として重要な意味を持っていたシリママ慣行は、文化大革命などの影響でほとんど消滅しているが、これを記憶している人は多い。

ところが、中央政府の方針である西部大開発の影響は当地にも及び、漢民族が大勢到来する事態となった、その結果、シボ族の若者たちの中で、漢民族と結婚する者が増え、特にウルムチや伊犁市内のような都会では、10 組の婚姻のうち、約 4 組は漢民族との通婚であるといわれている。加えて、少数民族地域では小学校から中国語（標準語）が必修科目であり、双語教育の方針が転換しつつある。このような文化のベクトルは、高校生の大学進学にも強く反映し、漢語学習に一層の拍車をかける結果となっている。250 年間維持してきたシボ文化は、今日になって大きく変質の方向へ向かっていると見える。

### （3）政府の少数民族政策

このような傾向は、もちろん政府の政策によるところが大きい。それは中央集権的ナショナリズムに向けた、少数民族から見れば文化の求心力が失われ、逆に遠心的な外圧によって伝統が解体する方向に向かっているようにも見える。しかし、政府は決して少数民族の解体を狙っているわけではない。それどころか、憲法にも規定するように、中国では少数民族の独自の文化を尊重するのが基本

政策である。そのために、チャプチャルでも民俗風情園というシボ族文化の保存、展示を目的とする施設を作った。また清朝時代以来保持されたラマ教寺院は、文化大革命で無残に破壊されたが、これも最近、政府によって修復された。同園では、シボ族得意の弓場も設置されており、観光客が有料でこれを楽しんでいる。シボ族の民族的事業であった西遷に関しては、かなり大掛かりな展示があり、これは東シボでも同様である。これら政府の政策による施設は、いずれもシボ民族の文化を尊重し、これを内外に示して中国文化の多様性を謳歌するもののようなものである。

しかしながら、同時にこれらの施設は観光事業の一環であるという意味もあり、シボ族のみの民族文化の内向的求心性をことさらに強調するものではない。そこに中国政府（中央、地方をふくめて）の少数民族政策が内包する両義性を見ることが可能である。

例えば学校教育では、民族教育が正規の学校教育で行われている。他の民族教育の場合も同様であるが、新疆にはウイグル族、カザフ族などの少数民族多住地区では民族学校があり、専任の民族教師が民族教育をしている。そこでは民族語が強調され、民族歌謡なども音楽として教えられている。シボ族でも同様であるが、シボ族では進学意欲が高く、そのために小学校から民族学校ではなく、普通の（つまり中国語で教育が行われる）学校へ入学する者が多い。将来の進学、就職を考慮しての決断である。政府資金によるラマ教寺院の再建にしても、信仰としてのラマ教とともに、観光資源としての宗教施設という側面がある。シャーマンでさえも、政府から月給を得て働いている。そこは宗教を否定する共産主義イデオロギーといかに折り合いをつけるかが、政府と民族との双方に問われている。

#### (4) 少数民族としての文化力学

少数民族は常にドミナント集団との間に広義の緊張関係を持っている。それは常に葛藤状態であるとは限らないが、ややもすれば、ドミナントな主流文化に押し流される可能性が付きまとう。そこで、たえず意識的に民族文化の独自性を覚醒し、次代に伝達する自発的努力を怠ることができない。東シボでは、その自覚や努力がなされないまま、過去 200 有余年の間に民族文化は喪失されたが、今日になってそれを再興しようという動きが始めた。西シボから自発的に移住してきた 2 人の教師(夫婦)は、東シボの小学校で言葉や文字のほか、歌や踊りなど、あらゆる民族文化を教え、シボ語の教科書さえも編纂、発行しようと準備している。彼らは民族文化再生の強力な使命に燃えており、地方政府もこれをかなり援助しようとしている。

他方、シボ族に限らず、今日の中国では大規模な社会経済的変貌が進行中であり、そこで民族文化を維持させることは、漢民族を含めて、どの民族にも容易なことではない。いわんや、シボ族のような文字通りの少数民族にとっては、共産主義イデオロギーはもちろん、市場経済の影響を受け、民族文化の行方は定かでない。チャプチャルでも、自分たちの民族の将来を悲観する老人たちにも会ったが、今後とも、求心力と遠心力が交差する文化のダイナミックスを地方少数民族レベル、全国的レベル、そしてグローバルなレベルで観察してゆかなければならないであろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

丸山孝一「民族文化の再生運動」『シルクロード』18号 18-19 ページ、2008 年

〔学会発表〕(計 1 件)

丸山孝一「シボ族の文化変化」日本文化人類学会第 42 回研究大会、2008 年、京都大学

〔図書〕(計 1 件)

丸山孝一「民族文化の連続性と非連続性：錫伯族の文化的コミュニケーション問題」(共編『疎通と出版』所収(151-160 ページ)、2008 年、忠北大学出版部(韓国))

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
丸山孝一

(2) 研究分担者  
無し

(3) 連携研究者

姚麗娟教授(中央民族大学)

楊聖敏教授(同)

地木拉提教授(新疆師範大学)

瓦依提教授(同)

神崎明坤教授(西南女学院大学)

趙嘉麟学長(伊犁師範学院)

陳継秋校長(興隆台学校)

阿吉肖昌教諭(同)

文蘭教諭(同)

関清華氏(東京大学大学院生)

その他